

佐藤鐵太郎の海軍国防思想の発端

— 『国防私説』をめぐって—

張 万 拳

The Inception of Sato Tetsutaro's Naval Theory

—*Personal Comments about the National Defense*—

ZHANG Wanju

As a military theorist, Sato Tetsutaro played a key role in the history of the imperial Japanese navy and was known by many as “the Mahan of Japan.” According to Sato’s defense theory, the Empire of Japan had to focus more on the sea, rather than the mainland of China, to protect Japan’s global independence and maintain prosperous economic growth. Accordingly, Sato and his military theory were not welcomed by the imperial Japanese army, nor did the latter become a pillar of Japan’s national defense theory. But this doesn’t mean that Sato’s military theory is unimportant. This paper discusses the beginning of Sato’s military theory and analyzes when and how Sato started to concentrate his attention on the imperial Japanese navy’s theory of defense.

キーワード：佐藤鐵太郎 (Sato Tetsutaro)、海軍 (navy)、国防思想 (national defense theory)、発端 (beginning)、『国防私説』 (Kokubō shisetsu)

1 はじめに

本稿の目的は近代日本では有名な海軍国防戦略家として、「日本のマハン¹⁾」と称された佐藤鐵太郎の国防思想の生まれた背景と、当時の海軍さらに日本の国防に及ぼした影響を検討する。秋山真之とともに日本海軍の双璧であると記者に評価された²⁾ 佐藤鐵太郎は日本当時随一の海軍戦略理論の名家であり、近代日本海軍国防思想の形成と発展に大きな影響を与えたと考えられている。しかし、残念なことに、戦後から現在まで彼の戦略思想に触れた研究は多いと思われない。筆者は、現在の立場に立って、彼が主張した戦略理論は正しいか間違いかを評論することを避けたい。なぜなら、彼のすべての国防観点は彼に属する特殊な時代と日本国内外の実情の下での考えである。このために、佐藤が育った時代に遡り、同時期の日本及び日本陸海軍の実態を結んで彼の戦略思想の始まりを考察したい。

2 佐藤鐵太郎について

(1) 先行研究

近代日本の戦略理論家の代表的な存在であった秋山真之と石原莞爾に比べると、佐藤鐵太郎に関する研究は歴史学界であまり重視されていない。今もこの状況は大きく変わらず続いていると言ってもよい。先行研究について筆者の調べた限りにおいては、佐藤鐵太郎の国防理論を系統的に紹介して高く評価したのは伊藤皓文である³⁾。そして、佐藤の主要経歴と、彼の国防論や南進論を簡単に紹介した幾篇かの人物誌や文章がある⁴⁾。他には、黒野耐が近代日本の国防方針の制定と変遷に対する考察の中で、国防方針をめぐる海軍側の一つの声として、佐藤の代表作『帝国国防論』について言及している⁵⁾。そして、以上の研究と比べて、佐藤の生涯を詳細に整理し初めて佐藤の伝記を完成させ、佐藤研究を前に推し進めるのに最も大きく貢献したの

1) アルフレッド・セイヤー・マハン (Alfred Thayer Mahan) : 1840-1914、アメリカの海軍軍人、海軍戦略家である。マハンが1890年に書いた『海上権力史論』(The Influence of Sea Power upon History・1660-1783) は世界で広く伝えられる海洋戦略名作である。

2) 高橋鐵太郎『当面の人物フースヒー』東京・フースヒー社、1913年、130頁。

3) 伊藤皓文「明治国防政策史の考察——「帝国国防方針」と佐藤鐵太郎の国防理論」『外交時報』1026号、1966年3月、24-35頁。

4) 田中広巳「佐藤鐵太郎」『歴史読本別冊—日本海軍の名將と名參謀、新人物往来社、1985年夏季特別号。川村晃「第一次世界大戦の海將 中将佐藤鐵太郎——海主陸従を理論づける」『歴史と旅——帝国海軍提督総覧』第17巻第16号、秋田書店、1990年10月、141-145頁。平間洋一「佐藤鐵太郎：南進の理論的リーダー」『太平洋学会学会誌』第51号、1991年7月、102-103頁。

5) 黒野耐『帝国国防方針の研究——陸海軍国防思想の展開と特徴』東京：総和社、2000年。

は石川泰志であろう⁶⁾。佐藤の伝記を完成する前に、石川氏は『海軍国防思想史』⁷⁾において佐藤と日本海軍国防思想との関係を論じている。さらに、石川氏は『戦略論大系⑨佐藤鐵太郎』⁸⁾の中で、佐藤の海軍国防思想の代表作品を詳しく分析し、彼の優れている戦略理論を読者に説明している。したがって、石川氏の研究を通じて、国防戦略に対する佐藤の優れた先見性、遠大な視野を理解できる。しかし筆者からみれば、石川氏の論述はあまりに佐藤と彼の戦略理論の偉大さに集中しすぎるきらいがある。一方、その時代の日本国内情勢、特に陸海軍関係の下で、さらに当時の外交関係及び日本の置かれた国際環境の影響を受けて、佐藤は自分の国防理論を作り上げたのである。そのため、佐藤の経歴と戦略理論をより正確に理解しようとするなら、明治から大正を経て昭和までの政軍関係、陸海軍関係、国際環境、外交関係そして同時期の社会輿論と結びつけて考察する必要があると思う。

日本に比べて、中国でも徐々に佐藤鐵太郎の海洋国防論が注目されるようになってきている。ことに、『大家精要・佐藤鐵太郎』⁹⁾では佐藤の生涯及び彼の国防理論は簡略に紹介される。そして、『近代以来日本海権思想研究』¹⁰⁾、『日本海洋戦略研究』¹¹⁾のなかでは、佐藤と彼の海洋理論が近代日本の海洋発展の過程で演じた役割をちゃんと論ずる部分がある。これらの研究作品の足りないところといえば、即ち佐藤のすべての生涯における海洋国防研究の発端と彼の理論の変化の歩みに対する分析の不足であると敢えて指摘できる。

本稿では以上の先行研究の成果を受け継ぎ、佐藤鐵太郎の海軍国防思想の生まれた背景と過程およびその反響を明らかにする。具体的には、佐藤が清国と朝鮮へ調査に行った旅とその間の『国防私説』の執筆と完成を考察し、さらに『国防私説』の内容を通じて佐藤の国防思想の発端と雛形に対する分析を行う。

(2) 佐藤鐵太郎略歴

佐藤鐵太郎の海軍国防思想を検討する前に、彼の略歴を簡単にまとめておく¹²⁾。佐藤は慶応2

6) 石川泰志『佐藤鐵太郎海軍中將伝』東京：原書房、2000年。

7) 石川泰志『海軍国防思想史』東京：原書房、1995年。

8) 石川泰志『戦略論大系⑨佐藤鐵太郎』東京：芙蓉書房、2006年。

9) 段延志、陳華、閔雪昆『大家精要・佐藤鐵太郎』昆明：云南教育出版社、2011年。

10) 梅秀庭、博士論文『近代以来日本海権思想研究』、外交学院、2015年。

11) 修斌『日本海洋戦略研究』北京：中国社会科学出版社、2016年。

12) 海軍歴史保存会編『日本海軍史』第九卷（将官履歴 上）東京：第一法規出版、1995年、243-244頁。石川泰志前掲『佐藤鐵太郎海軍中將伝』附録佐藤鐵太郎年譜、540-555頁。JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A11115209900、叙位裁可書 昭和十七年 叙位卷二十（国立公文書館）。

(1866)年7月山形県鶴岡藩士の長男として生まれた。明治20(1887)年に海軍兵学校を卒業した。明治22(1889)年に清国と朝鮮へ調査に行っている間に『国防私説』を書き始めた。明治25(1892)年に海軍大学校を第一等の好成績で卒業した。佐藤の初陣は日清戦争で、砲艦「赤城」の航海長として活躍した。明治29(1896)年に海軍省軍務局第一課に抜擢され、国防研究に熱意をかけた佐藤は出羽重遠軍事課長と山本権兵衛軍務局長に目をかけられた。明治32(1899)年5月に英国駐在、明治34(1901)年1月に米国駐在員としておよそ二年半の間、留学生生活を送った。帰国して翌年の1月に佐藤は海軍大学校教官となり、11月に彼の留学成果と言われる『帝国国防論』が出版され、山本権兵衛海相の手を経て明治天皇に捧げられた。日本海海戦では戦功を挙げた佐藤は日露戦争の経験を生かして『帝国国防論』を補足し、海軍大学校での講義を整理して明治41(1908)年9月に『帝国国防史論』を完成させた。これは佐藤の海軍国防思想が成熟期に入っていると考えられている。佐藤は自強自衛と海主陸従の国防理論を唱え、同時期の日本の対外拡張のスローガンを強く批判していた。佐藤はマハンの海権論を生かして日本独特な地理環境と結び、日本海軍の独自の国防論を完成し、この点では海軍への影響力は甚大であった¹³⁾。しかしながら、佐藤のこのような「満蒙拡張反対」の議論は、戦前期日本において合理的な国家戦略論としてもはやされることはなかった¹⁴⁾。その後、戦艦艦長・海軍大学校教頭を経て明治45(1912)年少将にのぼり、軍令部次長・海軍大学校校長となり、大正5(1916)年中将にのぼった。大正12(1923)年に当時の加藤友三郎海相とそりが合わなかったため、予備役に編入されてしまった。その後も国防理論の研究を続け、昭和5(1930)年に『国防新論』を完成させた。昭和9(1934)年貴族院議員となり、17(1942)年3月4日に死去した。二日後、位階追陞の件¹⁵⁾で佐藤の生涯に対する評価からみれば、彼の海軍国防理論は近代日本の国防思想においてどのように位置づけられたのか明白であろう。

若シ夫レ戦史ノ研鑽ニ至リテハ、篤学熱誠慧眼紙背ニ徹シテ、他人ノ追従ヲ許サザル本官独特ノ壇場ト為ス。其ノ著ス所ニ帝国国防史論アリ、海洋国家国防ノ指鍼トシテ、我国唯一無二ノモノニシテ、後進之ガ為ニ啓発セラレ、今次大東亞戦争ニ於ケル赫々タル戦果モ、本論ニ負ヒ處甚大ナルモノアリ。(句読点は筆者)

13) 波多野澄雄「日本海軍と『南進』——その政策と理論の史的展開」(清水元編『両大戦間日本・東南アジア関係の諸相』「アジア経済研究所、1986年」)、209頁。

14) 五百旗頭真『戦後日本外交史』東京：有斐閣、1999年初版、12頁。

15) JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.A11115209900、叙位裁可書 昭和十七年 叙位卷二十(国立公文書館)。

もちろん、このような賞賛を佐藤に与えた時の国内外背景も注目されるべきである。真珠湾奇襲後の日本海軍は緒戦期の順調によって大勝利の戦果を獲得したため、海軍理論の名家としての佐藤はこのような褒め言葉で高く評価されるのは当然のことであろう。

3 『国防私説』

(1) 国防研究のきっかけ

明治20（1887）年海軍兵学校を卒業した佐藤は遠洋練習航海のため、練習艦「筑波」に乗組んでサンフランシスコに回航した。帰国後巡洋艦「浪速」に乗組み、操艦の経験を積んだ¹⁶⁾。そして、二年後の清国と朝鮮への航海経歴は佐藤が国防問題の研究に関心を持つきっかけとなる。すなわち、その時の航海での見聞によって佐藤はあるショックをうけ、日本の選ぶべき国防方針をよく考え始めたということである。したがって、佐藤の国防思想の始まりを理解するために、先ず彼の朝鮮での調査体験を考察する必要があると思われる。さらに、佐藤自身もこの重要な体験を思い出して本の中に書いている。以下のようにこの体験について、昭和13（1938）年佐藤はこう述べている¹⁷⁾。

明治二十三年の頃、軍艦鳥海の航海長心得として、朝鮮警備の任に当たった際に東学党事件其他の意外なる出来事に出逢ふたのであるが、当時朝鮮の状態は実に悲惨を極め、北には露西亞南には支那の為に、艀上に載せられ、將に料理の庖丁をうけんとしつつあったので、朝鮮を佐けて其滅亡を免れしめんとしつつある日本としては、この際如何にも日本らしく働かなければならぬは勿論である。吾輩等の如き卑き身分としては、此の局面に対し、如何にして御奉公に励むべきかを吟味するのが、何よりも大切であると信じたので、先軍人としての点より考察し、有事の際、其筋の参考となるべき諸点の研究に従事するのが、何よりも大切で、先第一に其研究するべき問題を決定せねばならぬと考えたのである。（下線筆者）

これは、甲申事変後の朝鮮局勢をめぐって清国・露西亞・日本は激しく対立していた時代背景を示唆している。当時朝鮮において日本の勢力を伸ばし、他の外来勢力に対抗するため、多数の日本人は、朝鮮が朝貢体制とくに清国から脱して独立国になるべきだと強く主張していた。

16) 石川泰志『佐藤鐵太郎海軍中将伝』、80-81頁。

17) 佐藤鐵太郎『日本民族の世界的使命』東京：奉仕会本部、1938年、103-104頁。

そのため、佐藤も例外なく、日本の力を発揮して朝鮮を助け、この難局を解決するのは日本の使命であるという信念を持っていた。しかし、佐藤は軍人であるが、彼の時局に対応する考え方は普通の軍人と相当に違っている。普通の軍人である場合には、上司からの命令に厳しく従い、指示通りに行動すれば十分であると言えよう。佐藤はこれと異なり、命令や指示に従う前に参考になる諸点の重要性に注目し、研究しようとする志を持つようになっていた。その上、同時代の日本国内における支配的な対外意識に沿い、佐藤は朝鮮をめぐる日本が清国や露西亜との戦争を行うことは避けたいという認識と覚悟を持っていた。これらの複雑な対外関係の下に、佐藤が日本の国防問題に関心を抱くようになるのは自然なことであると思われる。そして、『日本民族の世界的使命』の中で具体的に『国防私説』を執筆する動機について、佐藤は次のように述べている¹⁸⁾。

そこで吾輩は先第一に国防問題を研究し、意見の概要を当時の鳥海艦長たる品川少佐に進言し、清国北洋艦隊の朝鮮海峡に於ける活動状況を実査し、彼等の戦時行動に対する戦策を検索せんと欲し、朝鮮海峡に於ける作戦根拠地として天冠山錨地を選定せりとの情報を基礎とし、現地の調査に着手し、其実際に於て、天冠山にあらずして、古今島長直路なりしを知り、同地に於ける海図の不備なる地点の略測を行い、同地の軍用価値を増加せしめ、更に同錨地の西口より、朝鮮西岸に沿ふて北進する捷路を踏査し、浅水湾を視察し、牙山湾に入り、仁川に帰還するに及び、露清對朝鮮關係の将来と、我帝国の取るべき進路に関し、深く自ら感ずる所あり、秃筆を呵し、国防私説一卷を草し当路に進説する機を待ったのである。(下線筆者)

これは、朝鮮の現状によって刺激を受けて、佐藤は日本の取るべき方針への思索と日本の国防問題を研究する志を立ち始めた証であると指摘できる。そして、朝鮮現地での軍事調査を通して、佐藤は朝鮮をめぐる清国・露西亜・日本の関係と日本の取るべき進路を熟慮し、『国防私説』を執筆した。その中には彼の海軍国防思想の萌芽が現れているように思われる。ここまで、明治時期の朝鮮問題による朝鮮調査の体験は、佐藤が日本の国防問題を研究する最も重要なきっかけとなったことは明白に理解できるだろう。さらに、『国防私説』は佐藤の国防思想の研究生涯のおいてどのような位置を占めているのかについて、1938年佐藤は以下のように述べてい

18) 佐藤鐵太郎『日本民族の世界的使命』、104頁。

る¹⁹⁾。

これを今日に比すれば、若干其所見を異にする所ありとはいへ、其大体に於て大差ありとは認めぬのである。

ここから見ると、『国防私説』の中で表される国防観念は佐藤の生涯において一貫していたと言ってもよからう。言葉を変えて言えば、佐藤の代表作品『帝国国防史論』や『国防新論』などを深く理解するためには、何より大事なのは彼の『国防私説』の内容を考察しなければならないということである。

(2) 内容

『国防私説』の内容を分析する前にまずはっきり説明すべきこととして、『国防私説』は当時佐藤が書いた随筆なので、大衆に向かい正式に出版されなかったということである。筆者が調べた限り、『国防私説』の内容をより多く紹介したのは、もう前文で引用した『日本民族の世界的使命』の第五章「日清戦争以前に於ける国体観念と国防意見の概要」である。したがって、以下は主にこれを基本史料として、佐藤の国防思想の雛形にされる『国防私説』を考察しようとする。

1) 国家危機感と国防

佐藤は明治23(1890)年に筆をとり、そのまま篋底に潜めてその後も二三回修正を加えて明治25(1892)年に『国防私説』を脱稿した²⁰⁾。その中で、佐藤は国防の重要性を明白にするために、当時の東亜における国際局勢をめぐって日本が直面しなければならない危機を繰り返して強調した。即ち、まだ成長しており、大国に対抗し得るほどの国家実力持たない日本は、複雑な局勢の中で自立が脅かされ、厳しい境地に置かれていた。そこで、これらの危機の中で禍乱を未然に防ぐように、日本の国防事業の強化を忘れてはいけないという佐藤の警戒感が顕れている。次には、『国防私説』の中で、東亜における露西亞、清国、米国の勢力が日本に対する潜在的な脅威であると論じることを見てみよう。

まず、露西亞について以下のように論じている。

19) 佐藤鐵太郎『日本民族の世界的使命』、134頁。

20) 佐藤鐵太郎『日本民族の世界的使命』、134頁。

今また東朝鮮の界に望めり、もし露国をして乗すべき好機に遭しめば、必亜細亜を席卷し、遂に我国に臨まん²¹⁾。

若し朝鮮既に露に入らば、我国国防の安危、果して如何（中略）もし国産を起し国富を増進するを計り、而して国防の具を取めずんば、是れ賊の為に糧を積むもの何んぞ扱ばんや²²⁾。

次いで、米国について以下のように論じている。

米国は数十年來の長夢を覚破し、大に其海軍を拡張し、長足の進歩を以て英仏を凌駕せんとする計画あり。其志向の存する所、未だ知り易からずと雖も、蓋し海上の商權を掌握せんには、海軍の威力強大ならざるべからず。（中略）茲に海軍の大計画を定め、異日、東西兩洋に於ける海上の權を掌握せんとする企望を起せり²³⁾。

若し米の富饒を以て、加えるに兵備の整頓を以てし、大に東洋に雄飛する計画をなさば、（？）かよく力を米と角するものあらんや²⁴⁾。

次に、清国について以下のように論じている。

明治7（1874）年我軍臺灣を征し、其土蕃を降し、清の償金を得たり。既にして琉球を梟とし、王を華族に列す、これ維新以來、清に対して行う所なり（中略）依是見之、清深く琉球及臺灣の恥辱を心肝に銘じ、早晚我と戦い、其国辱を雪がんとするや明なり²⁵⁾。

我国の清に於けるは然らず、蕞爾たる小国を以て、常に辱を大国に加え、毫も自ら抑損する色なし²⁶⁾。

兩國の關係、既に如斯ならば、其俄然として兵革の聲を聞くに至るは、未だ知り易からざるなり。若し清国の海軍既に完備し、東征の師を起し、將に日を剋して我西邊に寇せんとするに際し、我国の国防未だ盛ならず、邊海の守禦また全からずんば、果してよく我国光

21) 同上、108頁。

22) 同上、112-113頁。

23) 同上、108-109頁。

24) 同上、116頁。

25) 同上、113-114頁。

26) 同上、115頁。

を保有し、我皇民の幸福を維持することを得んや²⁷⁾。

これは、露西亜が東洋へ拡張して朝鮮に侵入することを日本は強く警戒し、露西亜を日本の最も恐ろしいライバルであると見なしていることを理解できる。そして、米国の潜めている実力と、東洋へ発展する欲望をはっきり見抜き、米国を潜在的な競争相手と見なす。さらに、清国は明治政府の台湾出兵と琉球問題によって蒙った恥辱を雪ぐために、日本に復讐する可能性がある。したがって、清国の復讐戦を防備しなければならないと佐藤は呼びかけている。

これまで説明したように、佐藤は当時の日本の自立が受けられていた表面的、潜在的な脅威を分析し、そしてこれらの脅威に対応し危険を未然に防ぐために、軍備と国防の重要性を常に留意しなければならないとはっきり述べている。

2) 守勢防禦と攻勢防禦

以上のように佐藤は国家自立の危機感の提起を通じて、国防問題を重視すべきと提唱する。次には、佐藤は、当時の日本が自立を守るために「守勢防禦」と「攻勢防禦」の間にどちらを選ぶべきかについて、その利害を論定し、さらに「国防要則六條」を提出した。この「国防要則六條」を簡単にまとめて言うと、国を守るには国内に防ぐより国境外に防ぐ方針を取るべきこと、防禦線を国境にして防禦するのは駄目であり、進んで敵を国外に要撃すべき、攻守両能を具備する国防を建設しなければならないということである²⁸⁾。そして、佐藤は当時の他の国防論者の所説について、以下のように批判している。

其言に曰く、帝国防防は局地防禦を以て主眼とすべし（中略）又曰く、海門の防禦一日も忽諸にすべからずと。是等論者の説く所、千百数るに暇あらずと雖、其要旨を一掬してこれを謂えば、只単に守勢防禦を以て、国防を完成すべしと云うに過ぎざるなり。夫れ局地防禦論者の説く所、固より一概に憫笑し去る能わずと雖も、是を以て国防の主眼とするに至っては、愚もまた甚しと謂べし。請う少く其眼孔を大にし、大体を通覽することを努めよ。夫れ局地防禦の、一地点の守備に適するは固より論ずるを待たず、是故に環海の要所に、悉く完全なる局地防禦装置をなさば、渾身を包むに重甲を以てするが如く、其防禦の堅固なる。固より疑を寄せず。然れども、これ言うべくして行うべからざる難事たり。仮

27) 同上、116頁。

28) 佐藤鐵太郎『日本民族の世界的使命』、118-119頁。

令行い得べしとするも、其の費額の多き、民力の堪る所にあらず。仮令民力之に堪え、よく堅甲を以て全身を包むも、攻者もし、其全力を挙げて其一点を突かば、果して何を以て之に抗するを得んや²⁹⁾。(下線筆者)

夫れ局地防禦を以て邦国を守らんとするものは、猶頭を防ぐに胃を以てし、身を守るに甲を以てし、而して剣を以て全身を守るを知らざるもの也³⁰⁾。

これは、佐藤が当時の局地防禦論を正面から反論し、激しく批判していたことを明白に理解できる。当時の局地防禦論即ち守勢国防論の代表者は三浦梧楼と曾我祐準であった。明治22(1889)年に三浦の「兵備論」と、曾我の『日本国防論』が完成され、その主旨は固定防禦を主体とする国防論であった。その内容をまとめて言えば、露西亞の侵攻に対する陸軍の防衛は、兵力を分置し、露軍の上陸可能港湾・海岸・海峡等に構築した要塞に配置して防禦するという固定的守勢国防論である³¹⁾。この局地防禦論は前に紹介した佐藤が主張している「国防要則六條」と比べてみると、国内や国境にあって敵を防禦することと国境外に進んで敵を要撃し防衛することとは正反対の防衛理論であると言わなければならない。そのため、三浦・曾我を代表者として彼らの固定的守勢国防論は佐藤の批判対象となるのは自然なことであろう。

もう一つ注目すべき点は、局地守勢防禦の主力は陸軍であるということだ。局地守勢防衛は佐藤に批判されさらに否定されると、この防衛体系の主体である陸軍の重要性も自然的に否定される可能性ができくと思う。他には、費額の多少と民力の消耗を提起するのは陸軍の欠点を暴き、「陸主海従」の国防体系を変えてみようとする佐藤の海軍の立場に立つ国防観念は顕れている。

3) 「国防三線」の提起

そして、佐藤は海国である日本の国防線を三つの線に分けて説明している。即ち、第一線は遠海であり、第二線は近海沿岸であり、第三線は本土であるという「国防三線」である。そのうえ、海国防防を完善するには陸海軍はそれぞれどのような役割を担うべきかについて分析する。

第二第三線に於て敵を防禦するは、既に我戦利の一半を敵に贏するの後なり。第三線に至

29) 同上、119-120頁。

30) 同上、121頁。

31) 黒野耐『帝国国防方針の研究』、24頁。

つては、実に我邦土を敵に蹂躪に委せざるを得ず。其事情、固より局地戦における決戦と相反す。而して第三線国防は、以て第二線に其威力を加えるに足らず、第二線を以て第一線に転用するが如きは、夢想だも及ばざる所なり。是故に均く力を三線に用は、これ我威力を三分し、個個敵の全力に対せしむるに等し、これ実に国家の最も嫌う所にあらずや。是故に海国国防に於ては、実に重きを第一線に置き、国力を殫してこれを完成せざるべからず³²⁾。

夫れ陸軍を以て海国を衛るは、守勢防禦を以て邦国を衛るものなり。敵もし我本土の取るべからざるを知り、兵を引て海島に去り、我沿海の都市を掠奪し、我港口を封鎖せば乃ち如何（中略）依是見之、陸軍の盛大、宇内に冠たりと雖、海軍の勢力、微弱なるときは、其国防を全すること能わず。之に反し、我に強勢の海軍あり、敵を海辺に待たずして、これを洋上に邀撃し、其艦隊を敗り、其運送船を奪い、其海島をとり、直に進んで敵の海港を襲い、捕虜及海島を質とし、罪を敵に問わば、彼れ何を以て我正理の要求を拒むことを得んや。よし戦機少く後れ、敵兵業に我邊海に揚陸するも、我は進んで其防禦艦隊を破り、其運送船を奪い、敵をして後援の望なからしむることを得べし。もしそれ孤軍深く重地に入り、絶て後援の望なく、軍須また缺乏せば、敵兵勇なりと雖、又何を以て久きを保たんや³³⁾。（下線筆者）

これは、「国防三線」における第一線即ち遠海防衛の重要性を提起し、そのうえ、盛大な陸軍より強勢な海軍のほうが日本の第一線を守れ、本土の安全を全うことができるという論述だ。

4) 国防における陸海軍の役割の対比

そして、佐藤は陸海軍の国防に対する作用をいっそう具体的に列挙し対比して海軍の重要性と主体性を論証している。その要点を簡単にまとめ以下のように説明しておく。

- 一、陸軍のみを以て海国を守るのは、戦時において沿海の民産を掠奪せられ、良民を殺せられ、鉄道電信及製造場等を破壊せられる不幸を免れず。
- 二、海軍なき海国を攻めるときは、上陸容易なるのみならず、随意に援兵を加え、軍須を供給する利があり。
- 三、海軍なき海国は、外国の攻撃を受ける時に、海上の通路全く閉塞せられる。

32) 佐藤鐵太郎『日本民族の世界的使命』、123頁。

33) 同上、125頁。

- 四、海軍を以て海国を守るときは、其兵員、陸軍より多きを要せず、したがって生産の事業を妨げない。
- 五、海軍強大なる海国は、敵をして一步も国内に侵入せしめざるを得。故に交戦の際と雖も、国民は国産の繁殖に従事することを得。
- 六、海軍強大なるときは、敵の後援及軍須の供給を絶えことを得べし。
- 七、陸軍は、平時にあつて適切な用をなさず。
- 八、海軍は、平時四方に航海して国威を示し、商業・漁業の発達を保護し促進する。
- 九、陸軍を以て海国を守るものは、守戦の際多数の兵士を要し、民力及び国富を害すること多い。而して、海軍は此の害なし。
- 十、海軍は海国防防の主力なるは論を待たずと雖も、大陸諸邦を併合し、我版図を内地に拡むる力なし。故に大陸侵略主義の兵備に於いては之を主とすること能わず。

以上のように、佐藤は陸軍の欠点を明白に指摘し、それより海軍の優れているところをよく説明し陸主海従の国防体系を覆して海主陸従の国防体系へ導こうとする目的は容易に見抜くであらう。

5) 一流海軍の建設をめざす目標

次に、佐藤はいままでの論述を通じて自分の根本的な論点を提出している。

我帝国国防の主幹たるべき、海軍の程度は、既に其要領を概論せり。而して我海軍の現状を察するに、其の境域を距ること甚だ遼遠なり。今より益々之を拡張し、異日の大成を期するは是豈今日の一大急務にあらずや。(中略) 而して、もしこれを実行せんと欲せば、多数の艦船武器を備え、之を行うに莫大の経費を以てせざるべからず。当局者は世論に惑わず、毀誉に関せず、軍艦兵器の充実は軍人の教練と一日も離るべからざる方針を勇進すべし。如何に人物を養成するも、軍艦兵器にして完全ならずんば、百年一日の大事を如何すべきや(中略) 教育と軍艦と権衡を相失せざるの一義は、実に我海軍百年不変の大道なり。(中略) 我海軍の方針は防守自衛の道を完するにありとは、吾人の賛同する處なり。然れども防守自衛の四字は、未だ以て我海軍全般の構成を規定するに足らず、我海軍の整頓は、万国に冠たらざるべからず³⁴⁾。(下線筆者)

34) 佐藤鐵太郎『日本民族の世界的使命』、127-129頁。

これは、海軍を日本国防の主幹だという認識のもとで、世界一流の海軍を建設しなければならないという佐藤の主張である。

6) 余論

ここまで以上のような論説の出発点として、佐藤はもう一度日本の国防の一部に属すべき朝鮮の存亡を提起し、日本の取るべき手段を考えていた。

帝国国防の主眼は海防にあり、海防の主幹は海軍にあり、而して之を拡張する私案は既に之を論ぜり。吾人はこれより帝国国防を完成するに欠くべからざる一要義を論述し、国防私説の結論に代んとす。(中略) 熟ら東洋未来の形勢を按ずるに、帝国国運の盛衰は、一に朝鮮の存亡に懸れり。而して朝鮮を得るもの我に非ずんば、露清の孰れたるを論ぜず(中略) 朝鮮の死命を司るものは、露にあらざれば必清なり清に非ずんば必露なり。而して其露たり清たるを論ぜず、我国防上大害あるは実に明なりとす。然らば即、我国の為に計ること如何。他なし、若し朝鮮をして厳然独立せしむるを得ずば、寧ろ露清の志を得るに先ち、彼を併て我版面に入るるに在り。(下線筆者)

これは、日本の安全を守るために朝鮮を占領してもよいという佐藤の観念が分かる。しかしながら、朝鮮占領或は併合を実施してから、どのような外交効果を招くか、さらにそれによって派生される潜在的な問題をどのように対応すべきかについて、ここで佐藤はまだ全面的に考慮していなかった。したがって、ここまで佐藤の国防理論は未熟段階に置かれていると言えるであろう。

4 おわりに

以上のように、佐藤鐵太郎の国防思想の発端と言われている『国防私説』の完成と内容を簡単に考察してみた。そして、『国防私説』の内容からみれば、その特徴をまとめることができる。

第一に、『国防私説』のなかであらわれている理論の多くは国防戦略に関するもの、具体的な戦術を論じるところが少なく、したがって、ここから考えると、後世で佐藤鐵太郎を海軍戦略家と呼び、秋山真之を海軍戦術家と呼ぶのは自然なことではないだろうか。

第二に、『国防私説』における国防思想は佐藤の後期の国防思想とくらべると、たいへん変わったところがあまりなく、逆によく似て繋がっているとみなせるところが多い。当時の朝鮮を

めぐって極東の乱局に刺激され日本の取るべき政策さらに国防理念を考え、佐藤は、『国防私説』を書いて国防の重要性和「国防三線」を提起し、強いて国防に対して陸軍より海軍の主体性を提唱して一流海軍の建設をよびかけた。佐藤が日清戦争後で完成した『帝国国防論』であれ、日露戦争後で完成した『帝国国防史論』であれ、その基本的国防観念が『国防思想』の以上のような理念を受け継いでいることは明白である。そのため、『国防私説』は佐藤鐵太郎が国防問題および国防における海軍の役割を研究しはじめる萌芽だといってもよい。これからも筆者は、佐藤のほかの代表作品を例として、その相似点と相違点を考察して、彼の国防思想の発展と変化の軌跡を究明しようとする。